日蓮大聖人御書全集

四条金吾殿御返事（しじょうきんごどのごへんじ）

（煩悩即菩提の事（ぼんのうそくぼだいこと））

新版1520～1523

四条金吾殿御返事（煩悩即菩提の事）

文永9年(’72) 5月2日　51歳　四条金吾

日蓮が諸難について御とぶらい、今にはじめざる志、ありがたく候。

法華経の行者としてかかる大難にあい候は、くやしく思い候わず。いかほど生をうけ死にあい候とも、これほどの果報の生死は候わじ。また三悪四趣にこそ候いつらめ。今は生死切断し、仏果をうべき身となれば、よろこばしく候。

天台・伝教等は、迹門の理の一念三千の法門を弘め給うすら、なお怨嫉の難にあい給いぬ。日本にしては、伝教より義真・円澄・慈覚等、相伝して弘め給う。第十八代の座主、慈慧大師なり。御弟子あまたあり。その中に檀那・恵心・僧賀・禅瑜等と申して四人ましまします。法門また二つに分かれたり。檀那僧正は教を伝う。恵心僧都は観をまなぶ。されば、教と観とは日月のごとし。教はあさく、観はふかし。されば、檀那の法門はひろくしてあさし。恵心の法門はせばくしてふかし。

今、日蓮が弘通する法門は、せばきようなれどもはなはだふかし。その故は、彼の天台・伝教等の弘むるところの法よりは一重立ち入りたる故なり。本門寿量品の三大事とはこれなり。南無妙法蓮華経の七字ばかりを修行すれば、せばきがごとし。されども、三世の諸仏の師範、十方薩埵の導師、一切衆生皆成仏道の指南にてましますなれば、ふかきなり。

経に云わく「諸仏の智慧は甚深無量なり」云々。この経文に「諸仏」とは、十方三世の一切の諸仏、真言宗の

大日如来、浄土宗の阿弥陀、乃至諸宗・諸経の仏菩薩、過去・未来・現在の総諸仏、現在の釈迦如来等を諸仏と説き挙げて、次に「智慧」といえり。この智慧とはなにものぞ。諸法実相・十如果成の法体なり。その法体とはまたなにものぞ。南無妙法蓮華経これなり。釈に云わく「実相の深理、本有の妙法蓮華経」といえり。その諸法実相というも、釈迦・多宝の二仏とならうなり。諸法をば多宝に約し、実相をば釈迦に約す。これまた境智の二法なり。多宝は境なり、釈迦は智なり。境智而二にして、しかも境智不二の内証な

り。これらは、ゆゆしき大事の法門なり。

煩悩即菩提・生死即涅槃というも、これなり。まさしく男女交会のとき、南無妙法蓮華経ととなうるところを煩悩即菩提・生死即涅槃というなり。生死の当体、不生不滅とさとるより外に、生死即涅槃はなきなり。普賢経に云わく「煩悩を断ぜず、五欲を離れずして、諸根を浄め、諸罪を滅除することを得」。止観に云わく「無明・塵労は、即ちこれ菩提、生死は、即ち涅槃なり」。寿量品に云わく「つねに自らこの念を作す。何をもってか衆生をして、無上道に

入り、速やかに仏身を成就することを得しめんと」。方便品に云わく「世間の相は常住なり」等はこの意なるべし。かくのごとく、法体というも全く余にはあらず、ただ南無妙法蓮華経のことなり。

かかるいみじくとうとき法華経を、過去にてひざのしたにおきたてまつり、あるいはあなずり、くちひそみ、あるいは信じ奉らず、あるいは法華経の法門をなろうて一人をも教化し法命をつぐ人を、悪心をもってとによせかくによせおこづきわらい、あるいは「後生のつとめなれども、

まず今生かないがたければ、しばらくさしおけ」なんどと無量にいいうとめ、謗ぜしによって、今生に日蓮種々の大難にあうなり。諸経の頂上たる御経をひきくおき奉る故によりて、現世にまた人にさげられ用いられざるなり。譬喩品に「人にしたしみつくとも、人、心にいれて不便とおもうべからず」と説きたり。

しかるに、貴辺、法華経の行者となり、結句大難にもあい、日蓮をもたすけ給うこと、法師品の文に「化の四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を遣わして」と説き給う。

この中の「優婆塞」とは、貴辺のことにあらずんばたれをかささん。すでに法を聞いて信受して逆らわざればなり。不思議や、不思議や。もししからば、日蓮、法華経の法師なること疑いなきか。「則如来使（則ち如来の使いなり）」にもにたるらん、「行如来事（如来の事を行ず）」をも行ずるになりなん。

多宝塔中にして二仏並坐の時、上行菩薩に譲り給いし題目の五字を、日蓮ほぼひろめ申すなり。これ即ち上行菩薩の御使いか。貴辺また日蓮にしたがいて法華経の行者

として諸人にかたり給う。これあに流通にあらずや。法華経の信心をとおし給え。火をきるに、やすみぬれば火をえず。強盛の大信力をいだして、「法華宗の四条金吾、四条金吾」と、鎌倉中の上下万人、乃至日本国の一切衆生の口にうたわれ給え。あしき名さえ流す。いわんやよき名をや。いかにいわんや法華経ゆえの名をや。

女房にもこの由を云いふくめて、日月・両眼・そうのつばさと調い給え。日月あらば、冥途あるべきや。両眼あらば、三仏の顔貌拝見疑いなし。そうのつばさあらば、

寂光(じゃっこう)の宝刹(ほうせつ)へ飛(と)ばんこと須臾(しゅゆ)・刹那(せつな)なるべし。委(くわ)しくはまたまた申(もう)すべく候(そうろう)。恐惶謹言(きょうこうきんげん)。

五月二日(ごがつふつか)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)

四条金吾殿御返事(しじょうきんごどのごへんじ)